

## 研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) ながはし としふみ

氏 名 長橋 俊文

現 職 (所属: 長岡市立豊田小学校, 職名: 教諭)

令和 4 年 3 月修了, 学校教育専攻 学校教育深化コース (文理深化領域社会分野)

「博物館・資料館等における学芸員等と共同による授業開発」

## 1. 研究の概要

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)第 2 章第 2 節社会第 3 指導計画の作成と内容の取扱い 2 (3)「博物館や資料館などの施設の活用を図るとともに, 身近な地域及び国土の遺跡や文化財などについての調査活動を取り入れるようにすること。また, 内容に関わる専門家や関係者, 関係の諸機関との連携を図るようにすること」とある。身近な地域の博物館や資料館と連携した教育活動により児童は, 専門的な知識を習得し, 理解を深めること。そして, 身近な地域の社会的事象を地理的・歴史的に我が事と捉え, 社会的事象を多面的・多角的に捉えることに繋がることを見据え, 社会的事象について博物館や資料館の学芸員等専門家と連携することで小学校における教育活動に留まらず, 社会に開かれた授業になる開発を行う。

## 2. 研究の実際

本研究では, 新潟県長岡市公立小学校第 3 学年児童 32 名を対象に, 長岡市内に所在する長岡市立科学博物館と新潟県立歴史博物館の学芸員と共同による授業開発を行った。期間は, 2024 年 7 月~2025 年 3 月である。長岡市立科学博物館 2 回, 新潟県立歴史博物館 2 回の計 4 回の授業実践を行った。長岡市立科学博物館・新潟県立歴史博物館ともに, 1 回は博物館における見学, もう 1 回は学芸員が学校へ赴く出前授業とした。4 回の実践はすべて「昔の暮らしと道具」の単元を扱った。そのうち, 博物館における見学では, 冬の暮らしをテーマとし, 長岡市立科学博物館では, 長岡市の冬の暮らしについての展示を見学した。新潟県立歴史博物館では, 児童の住む地域から空間的に離れた上越市の雁木通りについての展示を見学した。本実践の特徴は, 4 回の実践に共通して同じ単元「昔の暮らしと道具」を扱うこと, 冬の暮らしという共通のテーマにおいて異なる地域(長岡市・上越市)を扱うこと, 昔の冬の暮らしと現代の冬の暮らしという時間の経過による違いを比較すること, 博物館学芸員が来校し, 出前授業を行ったり, 児童が出前授業を行った博物館へ見学に行ったりして学習の場を変えることである。

実践 1 回目は, 2024 年 7 月に実施した長岡市立科学博物館学芸員による出前授業である。

長岡市立科学博物館で民俗学を専門とする学芸員による出前授業では, 「昔の暮らしと道具」の単元において洗濯を扱った。学芸員との打合せでは, 昔と現在の洗濯の比較により, 現在の洗濯機を使用する洗濯の便利さという価値だけに注目するのではなく, 洗濯板を使っていた時代の洗濯

の価値を見だし、多面的な見方を伸ばすことを実践の目的とした。授業では、学芸員が洗濯板を紹介し、使い方や洗濯板の構造を説明した。洗濯板を主に使用していた時代は、洗濯は、井戸の水を使っていたこと、そして、その洗濯をする場所が井戸の近くであったことから井戸端会議という言葉が生まれたこと、洗濯板を使用していた時代は、洗濯を現代のように頻繁に行っていなかったことを習った。児童の振り返りシートから、昔の洗濯は、近所の人のコミュニケーションの場であったこと、洗濯板には表と裏があったり、石鹸を置く場所があったり、洗濯板の構造についての記述が多く見られた。次時は、児童が自分のハンカチを洗濯板を使用して洗った。児童は、「思っていたより手が痛くなる」という実感と、「昔の人はたくさんの量の洗濯はできない」という学芸員の話結び付け、当時の人の立場で多角的に考える姿が見られた。また、「手が痛くなるから、たくさん洗濯できないけれど、水をあまり使わないからエコだね」と使用する水の量が現代に比べて少ないことや、汚れを落としたいところを集中的に洗うことができるというメリットに注目するようになった。「すごく汚れた場合は、洗濯板を使いたい」と時代をこえて洗濯の仕方について考える児童がいた。

実践2回目は、2024年11月に実施した長岡市立科学博物館への見学である。

長岡市立科学博物館への見学では、実践1回目と同単元「昔のくらしと道具」において、児童に身近な長岡市の冬のくらしを扱った。学芸員との打合せでは、長岡の昔の冬のくらしに焦点化して当時の長岡市の冬のくらしと現代の長岡市の冬のくらしを比較することを目的とした。長岡市は全国で初めて道路に消雪パイプが設置されたこと、消雪パイプが設置される前は大量の雪を「こしき」などで掘るだけでなく、「かんじき」を使用して踏み固めていたことを学んだ。児童の振り返りシートには「長岡は昔から雪がたくさん降っていたんだと思った。今は消雪パイプがあるし、除雪車もあるから便利だと思った。昔は、わらを使って、服、履くものを作っていたけれど、今ではいろいろのタイプの服や丈夫な長靴もあるし、進化したと思った」など、現代と当時を比較する記述や、当時の道具を使いこなしながら生活することに注目する記述が見られた。見学当日は、博物館における展示方法の意図について説明してもらったことから「こんなに、（展示されている）ものを置いている理由を分かっていたいなかった」という記述がみられた。

実践3回目は、2025年3月に実施した新潟県立歴史博物館への見学である。

学芸員との打合せでは、長岡市と上越市という地域による冬のくらしの違いを比較することを目的とした。学芸員から、雁木の果たす役割や意味、積雪量の多い上越市の冬のくらしの様子について説明を受けた。その後、実際に蓑や藁靴を身に付けたり、こしきを使って雪を四角形に整えたりするという体験をした。児童の振り返りでは、「電線の高さまで雪があつて危ないと思った」「雪の下に町があるみたい」など展示内容により実感した上越市の積雪量の多さに関することが多くみられた。こしきは、使用用途に応じて複数の種類があることやかんじきに大人用と子ども用があるという記述がみられた。

実践4回目は、2025年3月に実施した新潟県立歴史博物館学芸員による出前授業である。

新潟県立歴史博物館で民俗学を専門とする学芸員による出前授業では、「昔のくらしと道具」の単元において衣服を扱った。学芸員との打合せでは、昔の衣服と現在の衣服の比較により、SDGsの視点から昔の衣服の価値を捉え直すこと目的とした。家庭で機織りをして布を作り、反物からきものを作っていたことを学んだ。きものは、まず外出の際に着る長着となり、長着の役目を果た

すと、仕事着、たんすの中の敷物、雑巾、着火剤となるという説明を受けた。振り返りでは、「昔の人は布から作るから、きものはとても貴重なものだった」「きものを作るのが大変だったから、すぐお店に行けば買える今より大切にしたり、無駄が少なかった」など、昔の衣服に対する見方を変えるような記述がみられた。

### 3. 研究の成果

4回の実践後、アンケートをとった。問A「長岡市立科学博物館では長岡市の昔の冬のくらしを学び、新潟県立歴史博物館では上越市の昔の冬のくらしを学びました。どちらがよかったですか」に対し、19名（59%）が「長岡市の冬のくらし」を選んだ。理由に、「長岡に住んでいるから上越より気になる」「自分が住んでいるところの昔を知ることができる」「日本で初めて道路に消雪パイプが設置されたことを知った」など、自分が住んでいる地域のことや、地域の過去と現在を比較できるよさを挙げる記述がみられた。13名（41%）が「上越市の冬のくらし」を選んだ。理由に、「（冬のくらしにおいて上越市の方が）道具をたくさん使ってとても工夫している」「上越市の方が雪から身を守るくふうをしている」「降った雪をブロック状にしておどろいた」など、道具の多さや工夫に関する記述がみられた。

問B「博物館へ行くことと、博物館の人から学校に来てもらうのでは、どちらがよかったですか」に対し、25名（78%）が「博物館へ行く」を選んだ。理由に、「歴史にタイムスリップしたみたいになるから」「博物館へ行った方が実物を見て、感じたことを考えられるから」「学校には持ってきてもらえないような物があるし、学校で話を聞くより、とてもわかりやすいから」など、博物館という空間や実物が多くあることによる理解のしやすさを挙げる記述がみられた。7名（22%）が「博物館の人から学校へ来てもらう」を選んだ。理由に「博物館に展示されていないものを見たり、触ったりできるから」など、実物を間近に見たり、触れたりできることの特別感をあげる記述がみられた。

問C「博物館の人から4回の授業をしてもらいました。何回目の授業がよかったですか」に対し、1回目（昔の洗濯についての出前授業）を選んだ児童が7名（22%）、2回目（長岡市立科学博物館で長岡市の昔の冬のくらしについての授業）を選んだ児童が4名（12%）、3回目（新潟県立歴史博物館で上越市の昔の冬のくらしについての授業）を選んだ児童が8名（25%）、4回目（昔の衣服についての出前授業）を選んだ児童が13名（41%）であった。1回目（昔の洗濯についての出前授業）を選んだ理由に「洗濯板などでハンカチを昔の人のように洗ってみて、わたしのおじいちゃん、ひいおばあちゃんが使っていたものを知れてとてもよかったと思いました。この1回目がきっかけでおばあちゃんに『昔はみんな洗濯板とたらいを使って洗濯をしていたの？』と聞いてみたら、『昔はものすごく大変だったけれど、今より持っている服がぜんぜんなかったよ』と言っていたのでわたしはすごくびっくりしました」など、実体験を基にしたことを挙げる記述が多かった。2回目（長岡市立科学博物館で長岡市の昔の冬のくらしについての授業）を選んだ理由に「自分たちが住んでいる場所が昔はどんなだったか分かった」と自分たちが住む地域の現在と過去を比較する記述がみられた。3回目（新潟県立歴史博物館で上越市の昔の冬のくらしについての授業）を選んだ理由に「長岡の歴史を学ぶのは好きだけど、上越の昔の冬のくらしを再現した歴史博物館の方が、家や家の中にある鍋など実際の大きさだった」「（当時を再現した）お店に入った

から見付けられたものがある！」など昔のくらしをリアルに再現されていることや、「長岡の冬のくらしと上越の冬のくらしを比べられた」など、地域を比較する記述があった。4回目（昔の衣服についての出前授業）を選んだ理由に「昔の人が布をどんなに大切にしていたか分かった」など昔の人の気持ちになって考えようとしたり、「布が昔はとても貴重なことが分かった」など時代による価値の違いに気付いたりする記述がみられた。

#### 4. まとめ

4回の博物館学芸員との共同による授業開発により、児童は専門的な知識を習得し、実物を見たり触れたりすることで実感を伴った理解を深める姿がみられた。博物館学芸員と連携することで児童の住む地域を中心に社会的事象を地理的・歴史的に我が事と捉え、社会的事象を多面的・多角的に捉えようとする姿が見られたことは、本研究の有効性を示したことであると考える。今後も、学年、単元問わず、総合的に地理・歴史・公民の見方・考え方の育成を多面的・多角的な見方・考え方の育成を軸とした博物館・資料館等における学芸員等と共同による授業開発により、社会に開かれた授業の可能性を探りたい。